

信念と願望の論理：ヴィトゲンシュタインの「志向」概念

安居，誠

<https://doi.org/10.15017/1398242>

出版情報：哲学論文集．25， pp.243-260， 1989-12-25．九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

信念と願望の論理

——ヴィトゲンシュタインの「志向」概念——

安居 誠

序

「家に帰ったとき何か驚くことがあるだろうと期待していたら、私の驚くようなことは何もなかった。そういうわけで、当然、私は驚いた」⁽¹⁾。

信念と願望の論理

この奇妙な一文はヴィトゲンシュタインの遺稿の中から切り出されたものであり、日付は一九四四年頃と推定されている。その性格は、編纂者の言葉に従うならば、「哲学のテキスト中に散在しているけれども哲学的著作には直接属さない」、おそらく「自伝的な」記述の一つということになる。⁽²⁾ところが、ほぼ同じ時期に書かれた『哲学探究』第一部に次のような箇所がある。「期待というものは、何が起こったとしても、それと一致するか、しないかのいずれかでなければならぬようにできている」。⁽³⁾二つの文を直接結び付ける根拠はない。しかし最初の引用に述べられているような事態が、いずれの場合に当たると問うことはそれ自体として意味がある。すなわちこの場合、「私」の期待は実現されたのだろうか、それとも裏

切られたのだろうか。

我々は、冒頭の文が、単にヴィトゲンシュタイン自身の或る日の奇妙な体験を書き留めたものではなく、彼の思索のスタイルを知る者にはすでに馴染みのものである、あの思考実験の一例だとする解釈を採りたい。というのは、この逆説的な問題は、ヴィトゲンシュタインが期待というものを——あるいはむしろ志向という概念一般をどう捉えているかを理解する上で重要な示唆を含んでいるように思われるからである。「志向 (Intention)」という術語そのものはおそらくフッサールから採られたものであり、その使用は『⁽⁵⁾哲学的考察』や『ウィーン学派』の時期に遡る。ここでは差し当って「期待する」や「願う」、「信じる」といった我々のさまざまな行為にあつて、基本的に保持されている共通の構造を示すものと受け取つておこう。

我々がこの概念に注目するのは理由がある。「志向」はヴィトゲンシュタインの思想の展開において特異な位置を占めている。それは導入の当初から彼の生涯の終わりに至るまで基本的な点で変容を蒙っていない。『探究』や『断片』の志向に関する論究のうち、表現そのものまで等しい箇所を『考察』に見出すことができるものは少なくない。一方で、我々の信じるところでは、ヴィトゲンシュタインの志向概念はそれ以前の——『論理哲学論考』を中心とする——彼の哲学とも、単に矛盾しないという以上の強い親和性を持つている。この親和性を明らかにすることは、彼の思索がそこで運動している座標系そのものを見定めることと重なり合つていくように思われる。本論文は、前述のパズルの考察を通じて、「前期」や「後期」といった接頭辞抜きでヴィトゲンシュタインの哲学について語る場を摸索する試みの一つである。

I

最初の問いに返ろう。何か驚くことがあるだろうという私の期待は、驚くことが何もないという事実によって裏切られた

のか、それとも、そのことに私が驚いたという事実によって適えられたのだろうか。まず、問いを発する端緒となった『探究』の一節をいま一度引いておこう。文章全体はこう続いている。

「『期待というものは、何が起こったとしても、それと一致するか、しないかのいずれかでなければならないようにできている。』

そこで次のように問われる。それでは、事実は期待によって然りと否とに規定されているのか、そうでないのか。すなわち、いかなる意味において期待が出来事によって——どんな出来事が生起するにせよ——応えられることになるかが規定されているのかと。それにはこう答えなければならぬ。「然り。期待の表現が無規定なものでないならば、つまりその表現が例えば異なった可能性の相反を含んでいるというのでなければ」⁽⁹⁾。

基本的な術語の注釈から始めよう。それは「意味」という語に關してである。『論考』の注意深い読者ならば、ここで「いかなる意味において (in welchem Sinne)」という語句を「いずれの方向において」というそれに置き換えて読むことができる。というのは、意味とは『論考』において、命題の現実との対応、すなわち両者が合致する方向を表わしていたからである。「二つの命題〈P〉と〈P'〉は反対の意味 (entgegengesetzten Sinn) を持っているが、それらには同一の現実が対応している」⁽⁷⁾。こうした用法は、一九一三年の「論理に関する覚え書き」においてすでに顕著である。「命題は、名辞の場合と異なり、事実がそれと一定の關係にあるような物差しである。そこで二極性と意味 (Bipolarität und Sinn) とが現れる。一本の矢が等方向性ないし逆方向性 (Gleich- oder Gegensinnigkeit) によって別の矢との關係のうちにあるのと同様な仕方⁽⁸⁾で、事実は命題との關係にある」⁽⁸⁾。要するに命題は二つの異なった仕方⁽⁸⁾で現実を反映している。命題を理解するということは、それが真であるとすれば、何が起こっているはずなのか (Was der Fall sein muß) を知ることであり、それが偽であつ

たととしても、やはり何が起こっているはずなのかを知らなければならない理由があるだろうか。「命題は、それが真である場合とそれが偽である場合とに対応する二つの極を持っている。これを我々は命題の意味 (den Sinn des Satzes) と呼ぶ」⁽⁹⁾。

真か偽かいずれか一方に決まるということは命題にとって本質的である。しかし、いずれの一方に決まるのかということはそのうちではない。このことは、ヴィトゲンシュタインが「言語と現実との一致」なるものを一般にどう捉えていたか解釈する上で基本的な論点になりうる。とりわけ我々にとって重要なのは、それから三十年を経た『探究』の中に、直接的な類縁を持つと思われる見解が見出せることである。「思想と現実との一致ないし調和は、私が誤って (täuschlich) あるものを赤いと言ふとき、それがともかく赤くないということのうちにある」⁽¹¹⁾。この場合、私の言表は現実に当てがわれた物差しであり、現実はそのそれ自体として何であれ、この物差しにそって解釈され、記述されるのである。ヴィトゲンシュタインにとつて言表が現実と「一致する」ための要件は、表現がそれ自体として確定している——従って、物差しとして適用可能である——ことであり、現実の中に何らかの一致点が見出されることではない。

同じ論点は、期待と出来事との一致という問題に対しても適用することができる。「期待は、それによつて生起する出来事が測られるような言わば一つの物差しを準備するのであり、しかもそれが期待された目盛り的一致しようがしまいが、無条件に測ることができるような仕方では準備するのである」⁽¹²⁾。すなわち、事実が期待によつて「然りと否とに」規定され、期待は出来事によつて「いずれの方向にか」応えられることになる (beantwortet werden wird)。ここで規定し、問いかけを行うのはあくまで期待とその表現であり、事実や出来事ではない。「何が起ころうとも (was immer kommt)」どんな出来事が生起するにせよ (welches immer eintreffen mag)」という二重の強調は文字通りに受け取られねばならない。期待はその表現が明確に規定されているかぎり、その後何が起ころうとも——あるいは全然何も起こらなかったとしても——いつさいの出来事を期待の充足とその幻滅という二つの色に塗り分ける。期待によつて、それが期待であるかぎり、場違いな出

来事というものは存在しない。

このことは我々の問題に何をもちたすのだろうか。まず第一に、私の期待が帰宅してから起こった出来事によって——つまり何も起こらなかったことによつて、然りと否とも応えられないように思えたのは、この場合の期待の表現が「無規定 (unbestimmt)」にすぎることではないか、ということが考えられる。事実、「何か驚くこと (a surprise)」という表現は曖昧なものを含んでいるように見える。結論から先に述べるならば、我々はこの可能性を排除できると思う。つまり「何か驚くことがあるだろう」という期待の表現に、およそ曖昧なものが含まれているとは思わない。

この点を説明するために、『探究』の定式の下敷きになっていると思われる箇所を『考察』から引いておこう。「我々はこの点でもつぱら、無条件に充足されるか、幻滅されるかのどちらかであらねばならないようなものとしての期待について語っているものであり、従つて、とりとめもない期待を問題にしているのではない」。言うまでもなく、この「とりとめもない期待 (eine Erwartung ins Blaue)」が、『探究』の「その表現が無規定であるような期待」に対応している。ところが、ここで言う「とりとめのなさ」が期待の「意味」に関わるものでないことは、前後の文脈から明らかなのである。問題になっているのは、むしろ期待の「文法」そのものに対する違背となるような無規定性であり、具体的にはラッセルの心的行為に関する理論に認められるような対象規定の在り方ないしはその不在に対する批判である。

ラッセルの理論では——ヴィトゲンシュタインの要約によれば——私が誰かにある命令を発し、彼がそれに基づいて行ったことが私を喜ばせたとすれば、彼はその命令を遂行したのだということになる。しかしこれは、私が林檎を一個食べたいと思つてゐるときに誰かが私の胃に一撃を加えて、私の食欲がなくなつたとすれば、私が本当に望んでいたのはこの殴打なのだ、と言うようなものではないだろうか。⁽¹³⁾ どちらの場合にも、私の命令の内容や願望の対象は、それらの遂行や成就に何ら役割を果たしていない。問題を期待の場合に戻すならば、こうした体験は確かに可能であろう。私は自分が何を期待しているのかを知らず、実現されてはじめて自分がそれを期待していたことを知る。「とりとめもなく」、「あてどない」期待。し

かし、こうした暗闇に向かつて笛を吹くような行為は、我々が「期待する」という言葉を適用する唯一の事例でもなければ、最も普通のそれでさえない。⁽¹⁴⁾我々は、実際には決して実現されないような事柄を願ひ、信じ、期待することができる。他方、「期待する (erwarten)」ことは「待つ (warten)」ことがそうであるのと同様、我々の現実の行為である。⁽¹⁵⁾従つて、我々が何を期待していたのかということ、その後起こつた出来事から推論することはできない。「期待は探求 (das Suchen) と関連がある。探求は、私の探しているものが現実に存在していなければならぬ」という必要なしに、自分が何を探しているのか私が知っていることを前提している」。⁽¹⁶⁾

II

「探求する」ことについては、『考察』で主として数学の問題との関連から論じられている。我々の関心と重なる部分を要約してみよう。我々は本来、我々が探すことのできるものだけを見出すことができる。「探す」とは、ここでは、あるものを見出すための一般的な方法を持つていゝることを含んでいる。もちろん、漫然たる手探り (planloses Tasten) ⁽¹⁷⁾によつて何かを見出すことはありうる。だが結局のところ、我々はそれを探していたわけではない。⁽¹⁷⁾探求の対象と方法との結び付きは本質的である。我々が何かを探しているということは、それが何なのか我々がすでに知っていることを意味する。「君がどんな風を探しているのか言つてごらん。そうすれば、君が何を探しているのか言つてみせよう」。⁽¹⁸⁾従つて、我々は探求において、すでに知っているものだけを見出すことができる。すなわち「探求の過程は分析的なものである」。⁽¹⁹⁾

これらの点に関しては、『探究』においても何ら変更が加えられていない。「君が探していたのは彼なのか。君は彼がここにいるのかどうかさえ知ることができなかったというのに。」——だがこうした問題は数学における探求に際して現実⁽²⁰⁾に起こっている。例えば、どうして角の三等分を求める (suchen) ようなことが可能だったのかという問題を立てることができる

る」⁽²⁰⁾。定規とコンパスだけを用いて、与えられた角を三等分することは不可能であり、このことはすでに証明されている。

すなわち作図問題の体系のうちに「角の三等分」はその場所を持たない。我々はいかにして、単に我々が見出すことができなかったというばかりではなく、最初から存在してもいないものを探すことができたのであろうか。すでに『考察』において、ヴィトゲンシュタインはこの問いに端的に答えている。「角の三等分が不可能である以上、それを求めることもまた一度もできはしなかったのである」⁽²¹⁾。角の三等分そのものは、直角定規とコンパスがあれば可能であることが示されている（ピールバッハ）。しかし、いづれにせよ、それは我々の探していたものではない。一方、作図の不可能性の証明に関しても同じことが言える。すなわち我々がそれを証明することは「定規とコンパスの体系」を、つまり本来そこで角の三等分が探し求められるべき場所を超え出ることによって初めて可能になる⁽²²⁾。従って、この不可能性の証明をもって、当該の作図問題の解答と見なすことはできない。それは直角定規とコンパスを使った作図と同様、解として不当なものであろう。我々は、すでに述べたように、「角の三等分」が作図問題のうちに存しないということを唯一正當に主張できるだけである。問いと応答、探求とその対象は同じ一つの場所に見出されるのでなければならぬ。我々はその場にはいない人間を絞首刑にすることができないのと同様、その場にはいない人間を——奇妙に聞こえるかも知れないが——探すこともまたできないのである⁽²³⁾。

数学を論理学によって「基礎づける」という構想がヴィトゲンシュタインの念頭に上ったことは一度もない。その点では確かに、いわゆる論理主義から明確に一線を画している。しかし、言葉の本来の意味における「発見」や「知識」をその数学論のうちに見出すことができないというかぎりにおいて、『プリンキピア・マテマティカ』の厳格な構成主義はヴィトゲンシュタインの思索に終始、影響を及ぼし続けたと言いうことができる。我々は数学において、ある対象に関する新しい事柄に何一つ出会ったことができない。出会ったとすれば、それはすでに一つの新しい対象なのである⁽²⁴⁾。こうした性格がとりわけ顕著に示されているのは、数学的命題（数学の定理）とその証明との関係においてである。すなわち証明が証明しているのは命題の意味であって、それ以上でも以下でもない⁽²⁵⁾。数学における証明とは、数学的命題の分析を意味する。従って、「完全に

分析された数学的命題はそれ自身の証明である」と言うことができる。⁽²⁵⁾ 両者の関係を説明するために、ヴィトゲンシュタインはここで一つの比喩に訴えている。「数学的命題はその証明に対して、ある物体の表面がこの物体そのものに対してあるような関係にある。命題の証明体 (Beweiskörper) という言葉を用いてもよいであろう」。⁽²⁷⁾

我々にとって非常に興味深いのは、きわめて似かよった比喩が『考察』の中で異なった主題に対して用いられている点である。言うまでもなく、期待とその充足に対してである。「P についての期待と P の実現は、例えば一つの物体の中空の形態と中空の形態 (Hohlform und Vollform) に対応している。その際 P はその立体の外形に対応し、この外形が与えられる異なった仕方が期待と実現との区別に対応する」。⁽²⁸⁾ 同じ比喩は、後年の著作においても保持されている。『探究』では、我々の願望や期待が「充たされている」とか「充たされていない」ということに関する範型 (Urbild) として、中空の円筒と中空の円筒が引き合いに出されている。⁽²⁹⁾ 『断片』においては原案により忠実に、期待とそれに適合する事実との関係が、中空の形態とそれに対応する中空の形態の適合として捉えられている。⁽³⁰⁾ なぜヴィトゲンシュタインは、同じ類比にこうも固執したのであろうか。この問題は我々の志向と現実の「一致」ということに関して貴重な示唆を含んでいる。ここでは、さきの数学的探求との関連からたどっていこう。

『探究』においても期待は『考察』と同様、意識的に数学的探求と結び付けて論じられている。例えば、前節の冒頭で引用された「期待する」という行為の意味規定に関わる部分は、さきの角の三等分云々という問題が提起された直後に現れている。両者を結び付ける連環は言うまでもなく、その「分析的性格」である。しばしば指摘されるように『探求』や『断片』で示されている見解のうち、どれがヴィトゲンシュタイン自身の主張でどれがその架空の対話者によるものなのか時として判別が困難である。しかし『断片』において「発見 (das Finden) が我々に我々の探していたものを初めて示し、願望の成就が我々の願っていたものを初めて示すのだという考えは、そうした過程を他人における期待や探求の兆候のように判断することを意味する」⁽³¹⁾ と言われるとき、この「考え」はヴィトゲンシュタイン自身のものでありえない。なぜならその場合、

いみじくも「兆候 (Symptome)」という語が示しているように、発見や成就は当の探求や願望の過程に対して総合的なものであることになるが、彼自身の考えはその逆である。すなわち発見はまさしく我々の探していたものの発見として、成就は我々の願っていた当のものの成就として記述されるのであり、しかもそれ以外の仕方では記述されえない。「何かが起こるであろう」という期待は、その期待の実現の期待と同じものである」⁽³²⁾。

我々がある立体を見ているときには、その立体ががらんだものであるか、中まで充填されているかということとは無関係にその外形を認めることができる。立体が円筒であるか三角錐であるかを確かめるために、それを叩いてみる必要はない。同様に、我々が何かが起こることを期待しているときには、この期待が実現されるか否かということと無関係に期待の対象を認めることができるのでなければならない。「ある人が期待そのものを見ることができるとすれば——彼は何が期待されているのかということを見るのでなければならないだろう。(ただし、彼が見ているものから期待されている事実へ至るために投影や比較の方法を必要としないようなやり方で)」⁽³³⁾。対応する『探究』の箇所を併せて参照することによって、次のことが気づかれる。ヴィトゲンシュタインはここで「知る」という言葉の使用を意図的に避けている。すなわち我々が何かを期待しているとき、我々は期待している当のものを「知っている」と言うことはできない。

確かに我々は、人から尋ねられれば、自分がいま何を期待しているのか答えることができる。だがこれは明らかに、我々が何かを「知っている」と言えるための要件を満たしていない。それは例えば、私が誰かに歯の痛みを訴えることができるからには、私は自分の歯痛を知っているのだと主張するようなものである。言うまでもなく、私が自分の痛みを「知る」とはできない。なぜなら、どんな名医の臨床的所見も最先端の理学検査も私の痛みとの反証とはなりえないからである。私の「痛み」は世界の中のいかなる事象とも矛盾することがなく、従って恒真命題と同様、世界がどう在るかということに関していかなる情報も与えない。そして我々は、我々に何らかの情報をもたらすものだけを「知識」と呼ぶことができる。同様に、何かが「起こるであろう」という我々の期待が、実際に何が「起こった」ということによつて反証されることは

ありえない。それらは言わば、同じ平面上に存在していない。

期待や願望、信念といった我々自身の意志に関わるはたらきを一般に特徴づけているのは、対象についてのある種の「知識」ではなく、むしろそれらに対する「驚きの不在 (die Abwesenheit des Staunens)」⁽³⁵⁾である。両者を混同してはならない。一方は総合的な概念であり、他方は分析的である。何ものも待っている人間の不意をつくことはできないし、期待している人間を驚かせることはできない。「それでもはや私はへしかしなせ、人はここで驚かないのか」と問われることを望ましい⁽³⁶⁾。ヴィトゲンシュタインがここで「なぜ (warum)」という問いを拒否するのは、それに対して我々が無意味な堂々巡りを繰り返すことしかできないからである。言語において、「P」という命題を記号Pの助けを借りずに記述することができないように、Pが起ころうという期待をPに言及せずに表現することは不可能である⁽³⁷⁾。尋ねられたときに自分が期待しているものが何なのか答えることができるというのは、期待に「関する」何らかの知識ではなく、むしろこの期待の表現そのものである。

ヴィトゲンシュタインにおいて、「志向」は文法的概念である。ここで言う「文法」とは、「算術は数の文法である」と語られる際の用法に等しい。すなわち志向はある閉じた記号の体系を前提し、そこにおいて自らの対象と直接触れ合っている。「我々が記号の中で考えているのだとすれば、我々はやはり記号の中で期待したり願望したりしているのである」⁽³⁹⁾。これに対して、我々は記号の中で驚くことはできない。「驚き」は文法的な概念ではない。そこでは複数の異なった概念が交叉しており、⁽⁴⁰⁾従って構造は閉じられていない。むしろそれは記号の「意味」そのものに関わっている。驚きとは、世界との根源的な出会いであり、いっさいの信念や意図から自由な端緒をなす。驚きを容れるための場所は、「志向」の中には存在しない。すでにヴィトゲンシュタインは『論考』の時期にそれを論理の領域から放逐している。「論理のなかでは、驚き (Überraschung) ⁽⁴¹⁾は決して存在しえない」。「論理において過程と結果は等価である (それ故、いかなる驚きもない)」⁽⁴²⁾。

III

冒頭の文で述べられているような事態の逆説的な性格は、もっぱら「驚きを期待する」という設定の逆説性に基づいている。というのは、現実には何が起こったとしても、我々の問題に基本的な変化はないように思われるからである。例えば帰宅してみると家が全焼していたが、私はすでに何か驚くことがあるだろうと期待していたので少しも驚かなかったという事態を想定することができる。この場合にも、私の期待は実現されたのかという問いに対して、二通りの答えが可能であるように思われる。だが一般に我々は、期待と現実との一致、不一致をどこで決めているのだろうか。あるいは期待が現実と「一致する」とは、そもそも何を意味しているのだろうか。

この点を考察するために、志向のいま一つの徴表について言及しなければならない。ある日、私が勤め先を出てみると路に私の旧友の一人が立っている。十年も顔を合わせていなかったのに私は非常に驚くが、彼のほうには少しも驚いたそぶりが無い。そこで、私はこの出会いが偶然ではなく、彼が私に「会いにきた」のだということを、ひとことも言葉を交わさないうちに理解する。このとき確かに私は、彼の「驚きの不在」のうちにその意図を認めたのだと言うことができる。だが無論、これは我々の意志が表現される最も普通の事例というわけではない。我々が通常意志の表現と見なすのは、例えば私の友人がその前夜彼の妻に、明日昔の友人に会うつもりだと告げるその行為である。ヴィトゲンシュタインは、これを「予言」ないし「予見」と呼んでいる。「人は自分自身の未来の行動を意図の表現において予言することができる」⁽⁴³⁾。

もちろん、これらが何か「驚きの不在」とは別の事柄を指している必要はない。ただ両者が重なり合うとしても、それは我々がこの「予言」という言葉を正しく解するかがりにおいてのことなのである。例えば人は、ある発言がその後起こったことの故に真であると言うことができる場合、それは予言であるという規定を与えるかもしれない。しかしこれは、ヴィト

ゲンシュタイン解釈としては明らかに誤っている。彼自身の言葉はこうである。「事実の定かならぬ予料 (Antizipieren) とは、これから起こらんとしているそのことが起こるであろうと、我々がいま考えることができるという点にある。あるいは、誤解を招く言い方であるが、これから起こらんとしているそのことを（あるいはそのことについて）我々がいま考えることができるという点にある」（強調は原著者）⁽⁴⁾。

両者の対照は際立っている。というのは、ここで懸念が表明されている「誤解」とは、まさしく「これから起こらんとしていること (was erst eintreffen wird)」を「現実が起こったこと」と混同することを意味しているからである。ヴィトゲンシュタインは『考察』でこの点を明確にしている。「言語の物差しは現在の点に当てられていなければならない⁽⁵⁾、そしてそれを越えて——言わば期待の方向を——指し示すのでなければならない」。我々が批判している解釈は、まさにこの「期待の方向」を取り違えているように思える。それは時間の遠近法における消尽点に自分自身を置き、我々の「予言」にも「未来」にも等しく回顧的な眼差しを向けているにすぎない。

ある発言が予言であるためには、それがこれから起こることになっている事柄に関する我々の「現在の」言表であるだけで十分である。問題が解答を、命令が遂行を前提しているように、予言は未来において適えられることを文法的に含んでいる。これは「予言 (Vorhersage)」という言葉の字面の詮索によるものではなく、その実際の「用法」に基づいている。確率の法則を取り上げてみよう。例えばコイン投げをする場合、十回投げればそのうち五回表が出るのが予言されているのだと考えることができる。だが実際に硬貨を投げてみて十回とも裏が出たとしても、私はそれによって確率の法則を反証したとは考えない。私はこの現象を「統計的偏差」という概念で——それが何らかの概念であるとして——説明し、コイン投げを続ける。なおも裏が出続ければ私の心にも疑いが生じるが、それは硬貨が両面とも裏ではないかというものであつて、「予言」そのものに対する疑いは最後まで起こらない。

予言は経験によって反証されない。何が「偏差」であり、「正規分布」であるかということは予言の権能に属しており、事

実の裁定には服さない。それは最初から外部の審級に対して開かれていない。ひとことで言えば、予言は知識ではないのである。従って、「予言」という規定によって意図されているのも「驚きの不在」と同様、知識との構造的な対比であり、その自己完結性であると考えられる。この規定の先駆をなすと思われるものもまた、『論考』の中に見出される。「我々が自ら構成するものだけを、我々は予見することができるのである」⁽⁴⁶⁾。

ここで志向と知識との区別をいまだ少し明確にしておきたい。「信じる」や「願う」、「期待する」などの動詞を志向のもとに等しく包摂することができるのは、我々がそれらの「主体」でありうるからである。これに対して、我々は知識の「主体」ではない。「彼はそれを信じているが、実際にはそうでない」と言うことはできても、「彼はそれを知っているが、実際にはそうでない」という言明は意味をなさない。⁽⁴⁷⁾「知る」という動詞の主語は言わば形式的にのみ「彼」なのであって、そこで本当に問題になっているのは知られている当のもの、現に妥当している事柄そのものである。

一九一六年、八月五日の『日記』で、ヴィトゲンシュタインは「表象する主体は空虚な妄想である。だが、意志する主体は存在する」と述べている。「表象」や「意志」ということで念頭に置かれているのがショーペンハウアーだとすれば、この「表象する主体」を認識主体、知識の主体と読み換えることはさほど困難ではない。「私には空が青く見える」という言明は、この知覚が十全なものであるとき、「空が青い」という命題に収斂していく。同様に、「私はPを知っている」ということが本当に言えるとするれば、それは「Pである」と述べているのであって、主体に関する言及を少しも含んではない。この意味で、私が何を知っているかということは、私が誰であるかということ何を何ら表現するものではない。「知る」ことは「見る」ことと同様、それが成就されたときに自分自身を削除する働きを含んでいる。「思考し、表象する主体は存在しない」と述べたとき、⁽⁴⁸⁾ヴィトゲンシュタインは両者のこのような親和性を念頭に置いていたものと思われる。

これに対して、「志向」のうちに分類された諸概念はそうした特性を持っていない。「私はPを信じている」が成立しているときに言えることは、私がPを信じているということであり、ただそれだけである。主体（＝主題）の変容はここでは起こらない。

だからこそ、私が何を信じ、何を願ひ、何を期待して生きているかということとは、私が誰であるかということをつねに立証しているのである。命題「私はPを知っている」と「私はPを信じている」において、二つのPは記号以外のものを共有していない。「探究」の574節において、「信念、期待、希望といった概念は、それらが思考に対して異質であるほど、互いに対して異質ではない」と述べられている。そしてここで言う「思考」とは、文脈から推して、すぐれて知的な働きを意味するものと思われる。

世界の中に焦点を結ぶことができるのは、「思考する」という働きだけが持つている特権である。現実にあつてゐる事象に到達したとき、それは「知る」という名で呼ばれることになり、我々の行為であることをやめる。これに対して我々の信念や願望の対象は、世界の中に存在する事物ではない。要するに我々は、我々の信じるものを信じ、願うものを願っているにすぎない。内に向かつて閉じていればこそ、「表現 (Äußerung)」について語ることが意味をなす。「私は彼の無実を信じている」は一つの表現であるが、「私は彼の無実を知っている」はそうではない。⁽⁴⁹⁾従つて、マルコム『回想』にある次のような記述の中に響いてゐるのは、疑いもなくヴィトゲンシュタイン自身の声なのである。「疑いや信念、確信というものは——感覚や情動、痛みなどと同じく——特徴的な顔の表情を持つてゐる。知識は特徴的な顔の表情を持つてゐない。疑いの口調、確信の口調はあるが、知識の口調というものはないのである」。⁽⁵⁰⁾

いわゆる観想的な知が世界の中の事象をその対象とし、実践的であるべき意志がそれらに直接関わる術すべを持たないということは、我々の生における一つの逆説である。だが問題は、にもかかわらず志向が現実と「一致する」と言われるとき、それはいかなる意味においてなのかということである。すでに述べたように、《私が期待しているとき、私はこの期待の対象がPであることを観察によらずに知つてゐる》と述べることは、単に冗長であるばかりか誤つてゐる。正しい表現はただ、《私はPを期待している》である。Pに関する私の期待が事象Pによつて充たされるということとは、「期待する」という語の文法に属する事柄であつて、世界についての知識ではない。問題はここでのPの身分である。それは命題Pを表す固有名詞でもなければ、その「意味」でもない。すでに我々は、「私はPを信じてゐる」におけるPが、客観的事象Pと記号以外のものを

共有していないと述べた。従って、Pが起ころうという私の期待が事実Pと一致するとすれば、それはこの共有する唯一のものにおいてのほか考えられない。我々が記号の中で自らの期待するものを期待し、記号の外で見知らぬものに出会って驚くのだとすれば、それらが交錯するところに他のものが存しえないことはむしろ自明であろう。

従って、冒頭の問題に与えられる解答はきわめて散文的なものである。我々が驚きを期待し、かつ驚くことが何もなくたつとすれば、我々の期待は裏切られたのであつて、そこに問題の生じる余地はない。当初の期待が裏切られたこと自体に我々が驚いたとしても、それはまた別の事柄である。これに対して、当然次のような反論が予想される。我々は期待している当のものに驚くことはできない。それは、我々自身の意図的な行為に驚かされることがないのと同様である。期待したところに驚きが見出されないということは、我々の志向に沿って解釈されたかぎりでの世界に関する何らかの報告をなすものではなく、言語の構造そのものの反映にすぎない。しかるに「驚きを期待する」ことが思考実験として可能であるのは、それが現実にも可能であるからにほかならない。従って、それは幻滅されるのと同等の論理的権利をもつて実現されうるのだから驚きにならない。驚きが期待したところになかったからといって、それが驚きでなくなるわけではない。むしろ驚きは、つねに我々の不意をつくことのうちにのみ存する。

こうした反論は、我々の期待がその「意味」において実現されることを素朴に前提している。実際には、我々の志向の内実が世界の中の出来事と重なり合うことは決してない。何か驚くことがあるだろうという私の期待は確かに実現されうるのであるが、それはそこに「驚くこと」が見出されたからであつて、実際に私が驚いたからではない。我々が記号の中で期待したり、願望したりするという命題は文字通りに受け取られねばならない。記号からその意味を排除することによって、はじめてヴィトゲンシュタインは期待と現実が「直接」結び付いていると書くことができたのである。⁽⁵¹⁾期待と充足は世界の中で重なり合うのではなく、言語の中の一点において「互いに触れ合っている」⁽⁵²⁾。我々の信念は裏切られ、期待は幻滅され、願望は成就されない。だがそのとき、我々は世界をまさしくそのようなものとして描き出している。ヴィトゲンシュタイン

にとつて生涯、神秘的であり続けたのは、世界がそれ自体としていかに在るかではなく、世界が我々の意志の外に存在しているといふことそのものなのである。⁽⁵³⁾

註

- (1) Werkausgabe Bd. 8 S. 513 (Vermischte Bemerkungen)
原文は英語で書かれてゐる。 When I came home I expected a surprise and there was no surprise for me, so, of course, I was surprised.
- (2) フォン・ウリクトによる序言を参照。
- (3) PU § 465.
- (4) こうした解釈を支持するものとしては、ヴィトゲンシュタインが一九四四年の春、それまで下働きをしていたニューキャッスルの病院からケンブリッジに戻つてゐるという伝記的事実がある。もつとも、このこと自体が問題の断片の年代を決めるのに使われた可能性は残る。さらに、この断片が英語で書かれてゐることが、独語の本文と区別することを目的としていたのは間違いない。しかしこのことも、断片の哲学的意義そのものを否定するには明らかに不十分であろう。
- (5) Anthony Kenny, Wittgenstein p. 124.
- (6) PU § 465.
- (7) TLP 4.0621.
- (8) Werkausgabe Bd. 1 S. 190.
- (9) Werkausgabe Bd. 1 S. 196.
- (10) Ibid.
- (11) PU § 429.
- (12) PB S. 70.

- (13) PB S. 68.
- (14) PB S. 64.
- (15) BB P. 21.
- (16) PB S. 72.
- (17) PB S. 67.
- (18) PB S. 177.
- (19) PB S. 67.
- (20) PB S. 177.
- (21) PU §463.
- (22) PB S. 177.
- (23) PB S. 177-8.
- (24) PU §462.
- (25) PB S. 183.
- (26) PB S. 142.
- (27) PB S. 192.
- (28) Ibid.
- (29) PB S. 71.
- (30) Z §54.
- (31) Z §57.
- (32) Z §68.
- (33) Z §56.
- (34) PU §452.

- (35) PU § 628.
- (36) Ibid.
- (37) PB S. 69.
- (38) PB S. 183.
- (39) PB S. 69.
- (40) PU II S. 549.
- (41) TLP 6.1251.
- (42) TLP 6.1261.
- (43) PU II S. 515.
- (44) Z § 62.
- (45) PB S. 72.
- (46) TLP 5.556.
- (47) UG § 42.
- (48) TLP 5.631.
- (49) UG § 180.
- (50) Norman Malcolm, A Memoir P. 92.
- (51) PB S. 72.
- (52) PU § 445.
- (53) TLP 6. 44.

著作名の略称は慣行に従う。The Blue and Brown Books (Basil Blackwell) を除き、右に挙げられている全てのページ数は、Ludwig Wittgenstein, Werkausgabe in 8 Bänden (Suhrkamp) に所収のものを指す。

(昭和六十三年本学大学院博士課程修了・近畿大学非常勤講師)